

ふるさとの歴史・文化の再発見と創造を考える

## ふるさと「風」

第十六号（二〇〇七年九月）

風につたい風に舞う

近藤治平

八月二十五日土曜日、行方市手賀の「我家我家」という農家の家畜小屋を改装したショールームで、真夏の夜の朗読舞と題してことば座のミニライブ公演を行なった。

ことば座は、その発信拠点を石岡市柴間のギター文化館としていることから、今回はギター文化館の協力を得て、ギターの生演奏を背景にした朗読舞となった。

最近はずっと無沙汰しているが、私のお気に入りの散歩コースである出し山周辺の雑木林に詠んだ一行文、新古今和歌集から引いた恋歌、そして小林幸枝さんの十八番ものといえる「新鈴が池物語」を、クラシックギターの練習曲を基に構成した風の声でのコラボレーションは、非常に楽しい舞台となり、夏の終りの愉快な一時を創る事ができた。

今年は夏は来ないのかと思わせる七月の陽気であったが、八月に入り、最高気温を塗り替えるところでもない猛暑の夏になり、かなり辛い稽古古となった。小林さんも体調を崩し、数日稽古を中止するほどであった。

旧盆が過ぎても一向に猛暑は収まらない。連日の熱帯夜である。クーラーの嫌いな私である

が、使わざるを得ない。これで万分の1か、いや兆分の一かも知れないが異常気象、温暖化に加担してしまったな、と別な側面では積極的（？）に温暖化を作り出しているのではあるが文明の利器に批判してみる自分が可笑しい。

夜半にクーラーをつけなければならぬなんて、と身勝手な理屈と感情で机に向っていると、この熱帯夜に関わらず軒下の虫達には恋の季節がやってきていた。恋人を求めて鳴く男どもの声が聞こえてくる。クーラーに冷やされた部屋であることを忘れさせる秋の風の声である。

香炉峰の雪は、とばかりに窓を開けた途端に熱風が吹き込んでくる。文明の利器の元には虫の声に涼を求める風情は無かった。

しかし、虫どもに恋の季節が来たのだから数日うちには秋の風が吹き始めるのだらうと、今日の熱帯夜を怨むことをやめる。案の定、数日が過ぎると、突然に秋風が吹き始めた。

自然に生きる力を失ってしまった私に数日後に秋風の来ることを察知することは出来ないが虫たちの声にはあきらかに秋を察知し、恋人を求めめる切実な自然の力を持っている。季節感を持たず、感情だけに恋人を求めめる私とは大違いだ。

風につたい風に舞う、などと独り善がりと言

葉に吹いてみるが、数日後には確りと秋風の吹き始めることの察知も、予感も出来ない己を自覚させられると、人の自然に恋歌の自由自在に詠むなどとは笑止千万といったところだ。

そんな笑止千万の私の一行の恋歌でも、小林さんの手話の言葉の舞いに表現されてみると、

「良いじゃないか。俺にもまだまだ恋する力はあるじゃないか」

と勘違いをさせられてしまう。

陽の山陰に沈んだ時、

―恋歌のつもって一人―

の朗読舞にあわせるかのように寒蝉（かんせん）が雑木林の葉を振るわせた。余りにも眩きの一行文に合い過ぎる。

「おい、あざとい音付けは止めようぜ！」  
仕上げのダビングで、音効担当者に声を荒げているかつての自分の姿が思い出されてしまった。

気がつくと陽はすっかりと暮れ落ちて、草叢のあちこちに虫たちの喧しく恋を求めめる切実の音が聞こえている。

「俺だって未だ切実さ。寒蝉である筈はない」  
そう力んでみたが、そんな風に力んでみせる私は矢張り寒蝉に違いないのだらう。

この公演にオカリナ奏者の野口さん夫妻が来られた。以前にお会いしたときから、どこかで土笛の風で朗読舞を、と思っていたので、公演後早速打診した所、スケジュールが合えばとお返事を頂いた。これでまた一つ新しい風が生まれ、舞が生まれることになる。

虫の大好きなピヨンス・ヨボセヨ。

ピヨンスのお家の窓にフランココしている蛹がないかしら？ 探してみてもちようだい。

実はね、お盆の前に花を飾った時、お便所にも緑と黄色のきれいなクチナシの一枝を飾ったの。

暑い日が続くから毎日お水を取り替えてやってたの。

台の上にポツポツ黒っぱい小さな玉がこぼれはじまったの。そして、四枚あった葉っぱも破れてきて一枚になっていたのよ。

おかしいと思って、よく観てみると小さな青虫が葉っぱのうしろにくっついてたのよ。ちよっとビツクリしたけど、どんな蝶々になるのかな、楽しみだね、と爺ちゃんと話したの。

葉っぱをムシャムシャ食べて少しづつ大きくなって、ウンチもいっぱいしたの。

二本目、三本目とクチナシの枝をさしてやっているうちに、突然いなくなっちゃったの。

「ここは暑くて嫌だったのかな？」  
「暗くて嫌だったのかな？」

といういろいろ考えてしまった。

そうしたら次の朝、床の上を這っていたのよ。もうビツクリ。昨夜、踏みつけられなくて良かったね、と摘み上げてまた葉っぱにのせてやったのよ。

四本目の枝を入れてやって、早く蝶々になっ

て広いお空に飛んでいけるといいね、と話してやったの。

仲良くしようと優しくしてあげたつもりだったのだけど、またいなくなってしまったの。

お便所は臭くて嫌だったのかな。たぶん、もうお外に行きたくなっただんだよね。

「まいごのまいごの青虫ちゃん。どこへ行っちゃたの？」

つぎの朝、ゴミをすてようとゴミ箱を持ったとき、ゴミ箱のへりを歩いているのを見つけたの。

うれしくてうれしくて、よかったよかった。どうして逃げるの？

あなたのお食事、ここよ

葉っぱにのせてあげたの。そうしたら夕方、身体の色が黄土色っぽくなって、身体を「く」の字のようにして、枝にじっとしていたのよ。

「もうすぐ蛹になるのかな」  
爺ちゃんがそう言ったけど、つぎの朝とうとういなくなっちゃったの。

ピヨンスのお家に蝶々さん飛んで行かなか

たかしら。

(一行詩)

- ・よしのさやぐ音に人をおも
- ・つましさの残る家に花のある
- ・汗をぬぐう目からすすりの花
- ・とうもろこし畑隣の家をかくす
- ・蓮一輪に身を乗り出してもとどかず ゆみこ

## ギター文化館発「常世の国の恋物語百」特別公演

# 小林幸枝フラメンコに朗読舞！

9月29日(土曜日) ギター文化館庭に月光の下、情熱のフラメンコ

の

風に吹かれて小林幸枝が府中城鈴姫伝説を朗読に舞います。

=9月29日(土曜日)午後6時半開場 午後7時開演=

(入場料: 前売券2500円 当日券3000円 前売り券はことば座&ギター文化館にて発売)

七月、風土記の丘でのボランティア・ガイド  
当番の時でした。

「この縁側は、どうして仕切りがあるのですか？」

「お勝手にある棚は何でしょうか？」

「それぞれの座敷の使い方は？」

「布団は何処に仕舞ったのでしょうか？」

七十代半ばの父親と五十代半ばの姉弟さん三人の方の大変熱心な質問に、ひたすら勉強不足とお許しを願って、後日返答することにしました。

移築された会津古民家に関する資料は風土記の丘事務所にも市役所にもなく、移築前の所在地である南会津郡下郷の町役場に問い合わせをしてみることにしました。

町役場の文化振興課に電話をして驚いたことに、古民家を譲り受けた旧佐藤家の「ご子孫が職員としていらしたのです。幸運でした。」

会津の古民家は、石のモニユメント「時の門」をくぐると、懐かしい茅葺の屋根を風景にとけ込ませてあります。

大小の石塊で作られた階段を上り門に入る。重厚な茅葺屋根と土間への入り口と、一部土塗り壁のある縁側のついた佇まい。

土間入口近くにある案内板によると「日光の北、山間の豪雪地帯にこの民家はあった。民家は深い茅屋根をもっていて南会津に降る大雪や

自然の厳しさから旧佐藤家の人々の生活を守り育んできた。当家は江戸時代後期になると、馬力運送業で経済力をつけ、小松川において肝煎（きもいり…世話をする人）をつとめる豪農であった」との説明がある。

さて、「ご子孫の佐藤様には、案内板に明記されている座敷の見取り図をもとにお話を伺いました。それをまとめたものが、以下に紹介します内容です。

―土間（ニワ）が日常生活の中心となっていて、農作業や炊事の場となっていた。また、そこには大切な労働力の馬が飼われていた馬屋（ウマヤ）があった。広間（オメエ）は囲炉裏（ユルイ）を囲んで調理、食事、団欒の場であり、時として、わら細工、夜なべ仕事や打ち合わせの場となった。

馬屋の隣りの板敷（イタシキ）は、小作人の寝泊りするところ。勝手（カツテ）は台所。そして床の間と仏壇のある奥の座（イリノザ）という座敷は、接待用の部屋で、冠婚葬祭などの場であった。

中の座敷（ナカノザシキ）は家族の寝室で、佐藤様の時は勉強部屋だったそうです。

もう一間、床の間のある奥の座敷（イリノザシキ）は主である夫婦の寝室。その横にある奥の縁側（イリノエンガワ）。そして途中仕切られている上の縁側（カミノエンガワ）。これは、身分の高い人が座敷を移動する時、縁側を通らないように仕切られていたのだそうです。ちなみ

に身分のある人の入口は、上の縁側の一部に設置されていたという。また、仕切られたところは、収納の場所でもあったという。

勝手（カツテ）にある棚は、台所用品の収納場所であった。

布団は、部屋の片隅に置き、客布団は別棟の「蔵」からその都度出し入れしていた。――

質問を受けてから一ヶ月余り後に、以上のことをお答えすることが出来、私にとってもこれからのガイドへの大きな自信となりました。

ご質問をいただきました三人の方々、そして懐かしみながら二回もお電話で対応していただきました佐藤さまに感謝申し上げます。そして、会津の民家が大切に保存されていくことを願いました。

灯火親しむべし。よい季節になりました。風土記の丘の広場から発掘された、沢山の縄文土器、同じく広場で発見された四千年前の縄文住居跡、常磐自動車道建設に伴って発見された奈良、平安時代の鉄、銅製品を製作する工房跡の鹿の子遺跡等の、復元家屋や石岡市内で発掘された埋蔵文化財に、風土記の丘展示室で出会ってみませんか。

是非おすすめいたします。

古に学び 古にときめき  
夢ふくらみ 夢はちぎれて

ちえこ

八月二十五日、行方市手賀にある須田帆布さんのショールーム&イベントハウス「我家我家」で真夏の夜の朗読舞ライブを行いました。

手賀の山奥にあるこの「我家我家」は、元は農家の豚舎だったところを改装して造られたものだそうです。

ここを最初に訪れた時、近藤さんは「豚小屋を改装したイベントハウスなんだそうだ。どんな所か行ってみたいと解らないけど、豚小屋だったというのがとても良いじゃないか」と未だ見てもいないのに、気に入った風に話していました。正直なところ、私は豚小屋で舞うのは嫌だと思っていました。

彫刻家の宮路さんの案内で到着してみてもビックリでした。豚舎だった面影など全くありませんでした。中に入ると、古民家風の丸太のままの太い梁が黒光りしていて、落ち着いた色合いの板の内壁が暖かく来た人を抱きしめてくれるような感じでした。ここ、本当に豚舎だったのかと信じる事ができませんでした。

初めて訪れたのは確か二月の末のことでした。主の須田さんと意気投合(?)した近藤さんは、その晩開かれる「葵バー」に招かれ、私も同席し、朗読舞を披露することとなりました。

それが縁で、三月の末に須田さんの主催で開催された「鹿鉄さよならコンサート」に招かれ、飛び入り出演で篠笛奏者とのコラボレーションもさせていただきました。

夏の気配のやってこない七月の中旬のこと、

近藤さんが、真夏の夜に蚊に吸われながらのミニ公演をやるのか、と思いつかれ、早速二人で我家我家に出かけ、須田さんにお話すると即断に了承のお返事をいただき、今回の公演が決まりました。

私の一番の応援者である母に、八月末に元豚小屋だったところでミニ公演をやるの、というところ「臭い。何でそんな所でやるの?」と嫌な顔をされてしまいました。それで、我家我家がどんなに素敵な所かを説明したのでしたが、豚小屋の先入観が抜けず、「近藤さん、少しおかしくない?」とまで言われてしまいました。

公演が近づいたある日、臭い臭いという母の先入観を消すためと、我家我家への道が狭い農道でわかりにくいことから、父に道を教えるために、親子三人で下見に出かけたのです。平日なので須田さんはいらっしゃいませんが、外観だけでも見れば母も安心するだろうと、小さな親孝行。

外見は古民家の大きな納屋風の建物ですから、中の素晴らしい改装の様子はうかがい知れませんが、母もやつと臭い豚小屋の先入観をぬぐうことが出来たようです。

当日、早めに会場に来て、我家我家に足を踏み入れた途端、母もビックリ。磨きこまれた床板と丸木の梁。落ち着いた板張りの内壁。その暖かさに大満足のようでした。

我家我家での公演は、ギター文化館の佐久間さんの協力を貰い、ギター演奏をバックに朗読

舞を行ないました。最初に近藤さんから、古今集の朗読舞と、鈴が池物語をクラシックギターの風の音で舞い演技するからね、といわれ、クラシックギターの音色がどのようなものか知らない私ですが、純日本調の歌や物語に、ヨーロッパの風が合うのかと思いましたが、とても気持ちよく舞い演技することが出来ました。

稽古の時、近藤さんが「小林さんに合わせようとは絶対に思わないで下さい。物語の内容にも合わせようと考えないで下さい。自分の演奏を楽しんでください」と佐久間さんに言っていたことが、本番で確りとやってもらえました。三人の気持ちが確り噛み合った感じで、とても楽しく舞うことが出来ました。

九月二十九日土曜日の午後七時から、同じ鈴が池物語を今度はフラメンコギターと一緒にコラボレーションすることになっています。

今度は、薪能のようにギター文化館の前庭で演じるようになりますが、ジプシーの踊りのように足を踏み鳴らして鈴姫を演じてみようかなと思ってもみませんが、そんなことをしたら「お前、何をやってるんだ!」と近藤さんに叱られるそうです。でも、毎回新しい演出で演じられるのはとても楽しく、幸せなことです。

九月二十九日のギター文化館での月下に舞う鈴が池物語、是非みていただきたいと思います。今までにない小林幸枝を観ていただけだと思います。

“オーレッ!”

## 特集 ふるさとの風にたずねて

武士と盗賊

打田昇三

「武士道」やら「軍人精神」が叫ばれていた時代だと、大和魂を侮辱するとして大目玉を食らうようなタイトルだが、例えば弥生人が先住の縄文人を駆逐して異なる文化を広めてゆく段階でも神話にある大国主命のように全部が全部「どつぞ、お受け取りください」と平和的に国譲りが行われたとは思えないし、いつの時代でも武力による征服となれば強奪、暴行、押収、徴用などが繰り返されたことは十分に推測できる。妙な取り合わせではあるが、戦いを仕事とする武士の誕生には盗賊との深い関わりがあったようで、石岡の歴史を見ても天慶二年(九三九)十一月二十一日に常陸国府へ押し寄せた平将門の軍勢千人は、勝利が確定した合戦の途中から盗賊に早変わりして国府庁舎に山積みされていた絹織物をはじめ多くの宝物を無断頂戴していった上に町を焼き尽くした。

「この世をばわが世とぞ思ふもち月のかけたる事もなしと思へば」…この自分勝手な歌を詠んだ藤原道長は、天皇の外戚として権力を振るい栄華を極めた人物である。道長に代表される藤原一族の公家社会は、権力が集中し政治は安定しているように見えたが、同族間の権力争いが続き、古代律令制度の崩壊から諸国に威令は行われず治安は乱れ社会は混乱して各地に反乱

が相次いだ。

庶民は戦乱の上に、疫病の流行やら、はびこる盗賊にも苦しめられていた。地方に現れた盗賊の多くは平将門軍のように普段は農民であり、合戦が起こると兵士になり勝てば幾らかの報酬を貰って農民に復帰できるが、負け組みに入ると残党狩りが厳しいから故郷にも戻れない。うっかり誘われて反乱軍にでも就職したら誰かに匿って貰うか、そのまま天下りで盗賊になるほか道はない。

平安時代も後期になると、石岡に眠る平国香の子孫である平氏が藤原氏に代わって天下を握るのだが、それまでの時代に国家に抵抗する勢力と見られていたのは、まず海の方こうから九州方面に攻めて来る外国の海賊、征服された縄文人の名残りである東北地方の蝦夷(えぞ、えみす)、主に瀬戸内海で活躍する海賊、将門のようになにかあれば反乱を起こす地方豪族、巨大化した比叡山(延暦寺)や興福寺など大寺院が抱える僧兵、そして各地に根城を持ち神出鬼没で強盗、窃盗などを繰り返して特に都の近辺で行動する盗賊たちであった。

ルーブル美術館の至宝で日本にもレプリカが有る人類最初の(正確には三番目だが)「ハンムラビ法典」には第六条から第二十五条まで窃盗の罪について第一九四条から第二一四条までは傷害の罪について書いてあるらしい。今から凡そ三七六〇年も前のメソポタミア文明時代バビロン第一王朝の王様が決めた法典にである。ところで、日本は邪馬台国のように部族制社会

が出発点であり推古天皇辺りまでの千年に近い間は「神がかり」が根拠だったから、犯罪も神様が嫌う「汚らわしい」こと、例えば古事記に記載された須佐之男命(すさのおのみこと)が姉さんの天照大神にした悪質なイタズラのようなことや、中には気の毒なことだが悪い病気などが犯罪にされていた。

大化の改新(六四五)の規制に始まり、大宝律令(七〇一)、養老律令(七一八)では一応の法律が整備されて犯罪についても「詐偽(詐欺)」「賊盗(強盗、窃盗)」「鬪訟(喧嘩沙汰、傷害、殺人)」などを犯罪として禁じ、特に天皇への反逆、謀反、神への不敬、目上や主人に対しての罪を重罪としたようである。刑罰は江戸時代まで継承された「笞(ち)」「杖(じょう)」「文字はツエだが、実際にはムチの回数増し」「徒(ず)」「監獄送り」「流(る)」「流罪」「死(し)」各種の死刑」を定めているが、基本的に人間が貴賤で区別されて使用人や奴隷に近い身分の人たちが多かったから、律(法)の通りに裁かれるのは宮廷に奉仕する今なら国家公務員の者だけで、それさえも甚だ曖昧だったと考えざるを得ない。後は管轄する地方官や、主人である貴族豪族の気分次第で犯罪の取り締まりや処分など行われていたような気がする。

国分寺建立を命じた聖武天皇の伯母で先帝に当たる元正天皇の時代に、宮中の大蔵省に勤めて蔵の中の漆(うるし)を管理する下級役人が、同僚と二人で漆を盗み小遣い稼ぎをした。これが露見して「流罪」の判決を受けた。当時

は盗んだ品物を絹に換算した値段で罰がきまつたらしく、漆も高価だったから重罪になった。犯人に幼い兄弟の子が居て、父親が遠国へ流されるのが忍びないので自分たちが奴隷になるから父親を許して欲しいと願いだした。この時に管轄する役所では判断が出来ず天皇に報告している。身代わりという特殊な事例ではあるが、罪の軽減に属する事項は裁判官にも権限がなかったそう、単純な窃盗事件なのに処分を天皇が決めている。女性の天皇は優しくて兄弟の願いを聞き入れ、奴隷にはされたが短い期間で元の身分に戻されたらしい。同罪の仲間は法律どおりに辺鄙な国へ流されたというから、不公平にはなる。

中国の制度を模して作られた日本の官制は、平安京遷都後に大幅な改正が行われたが機構組織の大部分は天皇、皇族、公家たちのための官職であり、特に庶民の治安維持や非常事態及び重大犯罪に対する危機管理は誠にお粗末なものであった。今の内閣府に相当する太政官の中に現代の法務省に相当する「刑部(ぎょうぶ)省」があり、その下に「囚獄司(しゅうごくし) 刑を執行する役所」が置かれて、平将門の首などもお世話になっているのだが、嵯峨天皇の時代(在位八〇九〜八三三)から「検非違使庁(けびいしちよう)」が設けられて刑部省の任務と重複するようになつた。検察と警察を兼ねたような検非違使には宮廷の警備を担当する「衛門府(えもんぶ)」の役人が任命されたから次第に権限が増し、刑部省は有名無実の官職になつてしまった。

十三世紀の終り頃に源頼朝は一応、全国統一を進め武士の統領として反逆者を討つことが任務の征夷大將軍(せいたいしやうぐん)に任命されたが、野心家の頼朝はこの役を直ぐ返上して「日本国惣追捕使(にほんこくそうつういふし)」という官職を自分で考え、強引に朝廷に承諾させてしまった。追捕使は諸国(地方)に置かれた警察のようなもので、犯罪者や反逆者を逮捕したり討伐することが出来る。一方で国ごとに「守護・地頭」を設置して自分の家臣を配置し、行政面と一部司法面を抑え、さらに自分が「日本国惣追捕使」になつた源頼朝は、ごく自然に国家公安委員長、警察庁長官、公安調査庁長官、検事総長、そして全国知事会のボスになつた訳で征夷大將軍は辞めても実権は握つていたから防衛省も掌握していたことになる。こうなれば朝廷と公卿は形だけの内閣を都に置いても権力は全て鎌倉に移るので、逆に考えれば治安対策は歪んだ形で万全になつたから、逃亡する源義経は苦労したのである。

武士が登場するまで「苦しいときの神頼み」というが、危機管理の中心は占いにあつた。都に置かれた御所内で政治の中心となる太政官の北、宮内庁に相当する中務省(なかつかさしょう)の東隣には陰陽寮(おんみょうりょう)があり、氣象庁のように宇宙を観察して異常を知らせるのが本来の仕事だが、次官級の陰陽博士の中から特に世襲の占い専門官がいて「陰陽師(おんみょうじ)」と呼ばれていた。朝廷の儀式を中心に、何かを行い又は何かが起こつた場合は、先

ず陰陽師の出番であり、占いで事を決め、護摩を焚き、お祈りで願いを成就させようとす。しかし効果が無い場合には力で怪物と向き合うしかない。

映画「ゲゲゲの鬼太郎」は別として不思議なことに怪物や妖怪が会社組織で出てくることはない。大抵の場合は単独行動である。そこで始めは朝廷の守護に任じていた者たちに怪物の処理が委任されるようになり一定の成果をあげた。彼らは武名を高めるために妖怪退治を進んで引き受けた。中には宣伝のために自分の武勇伝を創作した連中がいるかも知れない。怪物の正体は大部分が悪知恵の働く盗賊ではなかつたらうか。

### “ふるさと風の会”の会員を募集しています。

ふるさと風の会では、ふるさとの歴史・文化の再発見と創造を考える仲間を募集しております。自分達の住む国の暮らしと文化を真面目に表現し、ふるさと自慢をしたいと考える方々の、入会をお待ちしております。

会の集まりは、月初に会報作りを兼ねた懇親会と月一回の勉強会です。

入会に関するお問い合わせは、下記会員まで。

白井 啓治 0299-24-

2063

打田 昇三 0299-22-

ある。莊園の開墾が進み地方に豪族が現れて、ある時は農民として田畑を耕し、ある時は兵士として合戦に加わっていた使用人の間で仕事の分化が生じ、武器の使用に優れた者が武士になったのは当然かも知れない。地方の豪族は自分たちが開拓し或いは褒美に授けられたりした領地を守りながら主君と決めた藤原一族に忠誠を誓い盛んに贈り物をして朝廷から官職を授かることを何よりの励みにしていた。運良く天皇、上皇や法皇、或いは高級公家の屋敷を警備する仕事に恵まれれば道が開ける。

朝廷や公家の用心棒のような立場にあった武士にとつて、飛躍のチャンスは地方の反乱である。この討伐に成功すれば忽ちにして武名が上がり、天皇に拝謁する地位も与えられて出世街道を登れるのだが、ここに面倒な問題があった。名も無い武士には中々命令が与えられないし、何よりも陰陽師の世界が武士の行動を規制するのである。反乱が小規模な場合には諸国に設けられた検非違使、追捕使などが国府常備軍の軍兵を率いて鎮庄に向かうのだが、重大事であれば朝廷が然るべき人物を将軍に任命し、將軍は自分で集めた武士団を率いて事件を解決する訳だから公卿には公共工事などの丸投げと同じである。官僚は出陣の命令書を作成し、陰陽師に命じて吉凶を占い、出陣の日取りなどを公式に決める訳だから、何分にも時間がかかり過ぎて大概の場合は間に合わない。

徳川光圀の「大日本史」と共に幕末の勤皇思想に影響を与えた頼山陽の「日本外史」冒頭に

「…鳥羽帝の時、しばしば制符を下して、諸州の武士の源平二氏に属するを禁ぜしを見て…云々」とある。事件があることに、まず警備会社の大手企業というか、皇族を祖先に持つ源氏か平氏の武將が指揮官に任命されるから、下請けで従軍する中小武士団の社長が、親会社の社長を統領と仰ぐ風潮が平安時代後期から出てきたのは当然のことなのである。

平将門を討ち果たした平貞盛は、父・国香の遺領である筑波山周辺の広大な土地を弟の繁盛に与え、自分は都に上つて官僚となった。将門追討の功績で陸奥守、鎮守府將軍(ちんじゅふしよづくん)という地位に就いて一時期は東北地方に勢力を張っていたようであるが、藤原全盛時代のこと、桓武平氏の威光も衰え、是と言った功績も伝えられず、都に帰つて子孫が「受領階層(ずりようかいそう) 中央から派遣される臯知事予備群」として何処かの国司に任命されるのを待っていた。一条天皇時代に、枕草子を著わした清少納言の主である不遇の定子皇后に協力した平氏の話が伝わっているが同族であるうか。これは未だ恵まれたほうなので、受領階層も藤原氏優先だから中々指名が受けられない。後に平清盛が摂政関白太政大臣として権力の座に昇りつめるが、平氏一族が華々しく歴史に登場するのは清盛の父親の時代になってからのことでありその地盤としたのは国司として着任した伊勢の国だったといわれる。

それに引き換え源氏は藤原道長に接近していた源頼信が、平将門の意志を継ぐ平忠常の乱を

平定したのを手始めに、八幡太郎義家に代表されるように前九年の役や後三年の役に関わり東北地方に遠征して功績を顕し、平氏の源流である常陸の大掾(だいしょう)氏を始めとして東国の中小武士団に統領として仰がれるようになった。それどころか、早くから常陸北部に君臨した佐竹氏や甲斐国に定着した武田氏などは源氏の分流なのである。源氏や平氏は数えきれないほど流派がある。しかし一般には桓武天皇の子孫である平氏と清和天皇の子孫である源氏が代表格で、武士団として登場するものこの二つの系統である。

常陸国の高級官僚として、恐らく石岡にも赴任してきた末流皇族に「経基王(つねもとおう)」という人物がいた。第五十六代・清和天皇の孫とされているが、実際には第五十七代・陽成天皇の孫らしい。此の天皇の母親は若い頃に美男で知られた在原業平と駆け落ちした藤原高子である。九歳で即位したのだが性質狂暴、宮中で自分の乳母を手討ちにした疑いを持たれ、動物虐待を繰り返したようである。「自分はおかしい！」と申告して八年ほどで退位した。天皇は辞めたが八十過ぎまで長生きしたから子孫も多い。

経基王は、平将門の反乱をいち早く都に報告した人物として知られている。報告した時点では未だ一族の領地争いに過ぎなかったため「そっかしい人物」として評価されなかったときに事件が拡大したので手柄になった。形だけは将門追討にも関わり、その功で従五位の下、後に正四位の下に叙され、源姓を貰つて子孫は武

臣となり旗印は白を用いた。源経基の嫡男を満仲（みつなか）という。摂津（大阪）多田を本拠として多田源氏と呼ばれた。

源氏物語にも実名で登場する冷泉（れいせい）天皇時代に「安和の変（あんなのへん）」があった。天皇の弟で将来を嘱望されていた為平親王が藤原氏の謀略で失脚させられた事件である。冷泉天皇は村上天皇の第二皇子で、陽成天皇ほどではないが奇行があり皇位継承を危ぶまれていた。母親が有力者の藤原師輔（ふじわらのもろすけ 道長の祖父）の娘だったために即位できたのだが、次の皇太子に推されていたのが為平親王である。嵯峨系源氏の娘を妃にしていたため、もし為平親王が皇位に就くと藤原氏の皇后ではなくなる。これは一族にとつて重大事である。藤原氏は村上天皇第五皇子の守平親王（円融天皇）を即位させる画策をしていた。その時期に実に都合良く、為平親王を関東に迎えて天皇にするクーデター計画が発覚したのである。

陰謀の首謀者は、平貞盛と共に平将門を討ち取り天慶の乱を平定した藤原秀郷の次男・藤原千晴と何名かの中級官僚であり、メンバーには多田満仲も加担していた。ところが、決行前に満仲が警察に出頭して計画の全部を白白してしまった。天皇に代わる時の摂政の命令で一味は逮捕され陰謀は未遂に終わった。

これで為平親王は皇太子の内定を取り消しにされた。密告した多田満仲にはお咎めなし、後に昔の運輸大臣のような役に就き従三位に叙されている。自首した原因は首謀者の藤原千春と仲

が悪かったからだと言うが、それならば最初から仲間には入れない筈で、誰もがこれを藤原氏の謀略と見ている。

多田満仲には確かな数だけで五人の男子があった。一人は僧となり、四人は武士になったが、次男の頼親は大和（奈良）に土着して興福寺の僧兵と争い土佐に流された。五男の系統は関東甲信越に根を下ろし武田氏などに武士として仕えたようだ。三男と思われるのが先に述べたように早くから権力者・藤原道長に接近して武功を顕し、源頼朝に至る清和源氏本流を伝えた源頼信である。

長徳三年（九九七）八月の末に当時は清和源氏の棟梁である多田満仲が八十六歳で世を去った。仏門に帰依していたため満慶入道と呼ばれる。宮中へ昇殿できる身分にあつたので当時の天皇から見舞いの勅使が遣わされ葬儀には大勢の公家や武士が参列した。立場的には石岡ゆかりの平国香に相当するのだが、国香の場合は筑波周辺に土着して荘園の拡大に力を入れて実をとつた。満仲は常陸のほか武蔵、摂津、美濃、信濃、越前、陸奥、伊予の国主を歴任しているから経歴は派手である。葬儀の喪主は当時、東宮大進（とうぐうのだいしん 皇太子付の局長職）にあつた長男の頼光が勤めた。

葬儀が無事に盛大に終つて暫く経つた頃、頼光は弟の頼信が屋敷内に籠っているとの報告を受けた。この時に頼信は、安和の変で退位させられた冷泉上皇付きの管理職にあつたのだが役目のほつも滞り勝ちになる。頼光は年の離れた

弟の頼信を息子のように思っていたから、早速本人に逢つて聞いてみたのだが疑惑を質された政治家のように「何でもありません！」と答えるだけで要領を得ない。頼信は二十六歳になつたのに女性の影が無かつたから、その所為かと知人に縁談を頼んだところ名門の御曹司で将来を嘱望されている人物のことで忽ちダンボール箱に幾つもの見合い写真が送られてきた。それを見せても新聞の折込広告ぐらいいしか目をくれない。

そのうちに「頼信殿はどなたかに恋をされておいでなのでは」と言う者がいたので頼光は奥方に聞かせることにした。その頃、奥方の許に東山に住む或る尼の娘が奉公に来ることになつていた。この女性は夫に先立たれてから尼になつたのだが、かつて高貴な女性の乳母をしていたことがある。尼が育てたその女性は、当時、一条天皇の後宮で命婦（みよづぶ）をしていた。尼の娘が頼光の奥方の許に出仕した日、珍しく頼信が屋敷に来て、その娘に何事かを真剣に頼んでいる様子を北の方が目撃してしまった。

奥方から話を聞いた頼光は「さては恋の相手は、その娘であつたのだろうか？」と、疑問に感じながらも藁を掴むような気持ちで、奥方と二人で奉公に来た娘に問い質してみると意外なことが分かつた。どこで知つたか頼光の恋の相手は娘の母親が育てた命婦だったのである。命婦とは、天皇に仕える女官のうち高い官位を持つ者を言い、天皇の寵愛を受けることもある。幾ら将来性があつても武士などが近づける相手



ではない。頼信は、兄嫁の許に奉公に来た娘が命婦の乳母の子と知って、大胆にもラブレターの宅配を頼んだのである。

事実を知った頼光は驚きかつ当惑した。合戦や怪物退治なら喜んで引き受ける武将だが、「弟が命婦に恋をした」という難題に手も足も出ない。宅配を頼まれた娘は、一瞬だけ自分にとまって胸をときめかせたのだが、夢から覚めてガツカリする暇も無く、主の弟から預かった手紙を持って宮中に行き、本命の命婦に手渡した。貰った命婦も天皇の手前、本心はどうでも「汚らわしい！」という態度で封も切らずに手紙を屑籠に放り込むしかない。

返事を貰えない頼信の想いはつのるばかり、ムダと知りつつも慣れない筆使いでセッセと「恋の片道切符」を切り続けた。その内に、このことが一条天皇の耳に入った。この天皇は藤原道長の専横に心を痛めつつ善政を心がけたように側近に有能な臣下が現れ、後宮に紫式部、清少納言らが奉仕して絢爛たる文化サロンを形成するなど歴代の治世でも優れた天皇とされる。

一条天皇に呼ばれた命婦は「猛き心と思われている武士にも、かように優しい心の者も居る。そちは如何に思うぞ」と問われたが答えるすべも無く黙って平伏しているしかない。英明な天皇は「ブツチャケタ話、お前は嫁に行っても良いのか嫌なのかハッキリしろ!」と言って命婦の眼をご覧になった。その眼が「その辺は察してよ!」と訴えているように感じた天皇は、直ちにこの命婦を源頼信に払い下げるよう命令を

下した。本人はもとより、親代わりの頼光も喜んで、長保二年(一〇〇〇)二月の吉日には晴れて婚礼が行われたのである。

数年の後この夫婦に長男が誕生した。その頃、頼光は美濃守として赴任していたが、甥の出生を喜び名前を「千手丸」とつけて祝った。千手丸は十一歳で伯父・頼光の許に元服し源頼義と名乗った。早くから武勇の誉れ高く、三条天皇や藤原道長の前で弓の技を披露したこともある。長元年(一〇二八)関東では平将門の意志を継ぐ平忠常(千葉氏の祖)がそむき、検非違使の平直方に出動命令が伝えられた。平直方は、貞盛の孫・維時(これとき)の子であり、後に源頼朝夫人となる北条氏の祖先とも言われている。

反乱の鎮圧であるから一刻を争うのに、先に述べたように政府所管の儀式として陰陽師の占いなどで出陣の日取りが決められるから吉日がなくて直ぐには出られない。四十日以上も経ってから出陣しても合戦に勝てる訳がなく鎮圧には向かったが、既に敵の勢力は拡大していて討伐どころではない。

朝廷は三年も経ってから平直方を呼び戻して、当時、信濃守として現地に赴任していた源頼信に乱の平定を命じた。嫡男の頼義も父に従って信濃に居た。かつて頼信は常陸介(事実上の長官)として石岡に住んで居たから茨城、千葉の土地には明るい。息子と共に忽ち乱を終息させてしまった。この合戦には常陸大掾(ひたちだいじょう)職として石岡に駐在していた国香の孫・維幹も軍勢三千を率いて従軍している。反乱とい

っても、忠常の祖父・平将門が起こした承平・天慶の乱と同じように中央の威光が衰え、地方の豪族が力を増してきたためのトラブルだったらしいので、かねて頼信の強さを知っていた忠常がアツサリと降伏して一件落着となったようである。

この事件で頼信、頼義父子の武名が高まり、特に頼義の若武者ぶりが週刊誌などで取り上げられるようになったのだが、戦果を上げられなかった平直方は源氏の武勇に感嘆して「ぜひ娘の婿に!」と頼義を望んだ。花婿は清和源氏のエリート公務員、花嫁は桓武平氏で石岡出身の一族となれば双方に異議はなく

長暦元年(一〇三七)秋に吉日を選んで京都で婚礼が行われた。清和源氏の棟梁として弟の頼信を盛り立ててくれた源頼光は既に十五年前に他界しており、今や兄の跡を継いで源氏の武名を上げている頼信は、朝に夕に石清水八幡宮の社前に祈りを捧げて源平両氏の血をひく孫の誕生を祈ったのである。その御利益により翌年の七月十四日、河内国(大阪府南部)にあった頼信の館で男子が誕生した。待望の男児には源氏の棟梁となるべく源太丸と名付けられ、祖父の頼信から産着の料として豪華な鎧が贈られた。これが源氏重代の家宝となる「源太が産着の鎧」又の名は「楯無(たてなし)の鎧」である。源太丸は七歳で石清水八幡宮において元服し八幡大菩薩の名を受けて八幡太郎源義家と称した。考えようによっては源氏・平氏を結びつけるキツカケとなった平忠常の乱は、平将門が討た

れてから八十年以上も経って将門の怨念を思わせるように発生したのだが、実はその四十年ほど前にも将門の亡霊のような騒動があり、ここに館があったという理由だけで河内の多田満仲が敵に襲われた。襲ってきたのは平将門の遺児と称している將軍太郎平良門である。

将門が討たれたのち、残党狩は苛酷を極めたという。ただ、敵味方に分かれた常陸平氏一門の中で終始、中立を保っていた者が居て将門の遺児を密かに匿ったことは想像できる。勇壮な野馬追い行事で知られた福島県の相馬氏や千葉県の名称のもとになった千葉氏などは将門の末裔と称している。また坂東市岩井にある国王神社は、将門の三女で仏門に入り如蔵尼と称した女性が、隠れていた奥州から父の三十三回忌に故郷を訪れ自ら刻んだ将門の木造を安置したのが最初だとされている。将門の死後に生まれて、奥州で如蔵尼に育てられたのが平良門だと伝えられるが真偽のほどは分からない。

如蔵尼は良門を僧にしようと考えていたのだが十五歳で自分の素性を知り、父親のように武士として名を上げたいと、諫める如蔵尼の許を飛び出して諸国放浪の旅に出た。優れた体格で生来の力大なので各地の盗賊どもを従えて九州、山陽、山陰、北陸と渡り歩き、播磨国の神戸近辺と思われる山中に根城を構えて周辺の豪族の動きを監視していた。その頃、隣国の摂津に居た多田満仲の館が別名を新田城と称して西国第一の要害と思われていた。これに乗っ取れば自分の武名も上がる。目標を新田城に合わせて攻

略の機会を窺っていた。

満仲の一門には屈強の武士が大勢居て、攝津国内に家臣が住み着いていたから迂闊には攻められない。そのうちに各地方へ赴任してゆく者があり、源頼光は内裏の守護に当り、頼親は天皇が奈良へ行幸する警備陣の一人として出かけるという情報が入ってきた。新田城には多田満仲と僅かな家臣しか残らない。

「チャンス到来！」良門は永祚二年（九八九）三月二十三日に神戸の巢窟を発ち満仲の領地である西宮に集結して付近の民家に押し入り、合戦の準備にと糧食を始め金目のものを悉く奪って攻撃の準備を整えた。

地元にいた家臣から満仲の元へ急報がもたらされたが賊の正体が分からない。軍勢は七、八百と見られ、盗賊にしては多すぎる。直ちに乱暴を止めなければ大事になると家臣は言うのだが、この時に満仲は頭を丸めて仏門に入り、幾多の合戦で殺めた人々の霊を弔うとし弓矢の使用を封じたところであった。仕方がないので主だった家臣が召集令状を発して呼び寄せた兵の数が二五〇ばかり、城に籠って戦い、援軍を待つばかりではないと決ま

って準備を進めた。三月二十五日朝から新田城を取り囲んだ敵は七百余、三度、喚声を上げてから大将と思われる大男が一步進み出て「桓武天皇の正統、平親王将門の二子、將軍太郎平良門、亡き父親に孝養のため義兵を起こした」と趣旨を説明したが、聞くほうでは全く知らない人物であるから、黙って櫓の上か

ら見下ろしているしかない。

敵陣から矢を射掛けてきたので、城方の若い者が怒って勇敢にも七〇人ほどで城門を開き一斉に攻め込んだ。まさか出てくると思わなかった敵は慌てて応戦したが押されて、両軍は日没まで戦った。応援が来ることを恐れた良門軍は城門前に二百ほどの兵を残し、他は裏手の山から村を焼いて攻めることを計画したが、城ではこれを見抜き地元の利で敵を追い詰める作戦を考えていた。

## “風の塾” 絵と一行文教室のご案内

絵の兼平ちえこ、文の白井啓治が講師をつとめる「絵と一行文の教室」が装いを新たに再出発しました。

日常の暮らしの中に発見した小さな幸せを「楽しい色の風に刷き、言葉に落として喜びの心にそっと仕舞う」。絵手紙とは全く違った、自由で自在に「幸せの色に遊び言葉に遊ぶ」という新しい自分表現を楽しみませんか。また数ヶ月に一度、小林幸枝の指導で一行文を朗読舞に楽しむと同時に「ふるさと風」の会報にコーナーを設け紹介もされます。教室の詳細は、下記連絡先までお問い合わせ下さい。

兼平ちえこ 0299-26-7178 白井 啓治 0299-24-2063

政府は

賊が勝つて都が襲われる事を心配し、摂政の指示で宮廷勤務中の頼光、頼親兄弟を特命で救援に向かわせた。頼光の家臣には四天王と称された四人の武将がいる。飴でお馴染の金太郎こと坂田の公時、一条戻り橋の鬼退治で知られた渡部源次綱、卜部(うらべ)季武そして碓井(うすい)貞光の四人である。四天王など軍勢四五〇騎が救援に駆けつけ大阪府下の各所で激戦が展開された。結局、平良門は源頼光に肩を射抜かれ渡部綱に討ち取られて事件は解決したのだが、騒動を聞きつけた近畿地方の盗賊たち千人ほどが、多田満仲不利と見て負けた武士から鎧兜や金品を奪い獲る目的で良門の軍に加わってきた。千人のアルバイトは、良門勝利の場合には武士の端くれとして生きられる可能性に期待していたのだろうか。良門が討たれたのを見て残りの者たちは我先にと逃げて行方は知れなかった。

源氏一族の活躍と功績は「誠に比類なきもの」として、朝廷から褒められたが公式手続きによる合戦ではなかったので表彰は行われず、褒美の品物だけが届けられた。もし良門の軍勢が勝つて都に攻め入っていたら将門のときと同じように反乱になったのだから、合戦に正規も臨時も無いのだが…この事件は日本史の公式記録には無い。平良門と名乗った大男の素性も定かではない。翌年の三月、都から日本海側の丹後へ通じる大江山に盗賊・酒頼童子(しゅてんど)一党が巣くって悪事を働き、それを頼光や四天王らが征伐する物語が伝わっているのだが、この話が良門の事件を置き換えたものかも

知れない。石岡にも親類の「茨城童子」が居たらしいから改めて調べてみたい。

個人的な推論だが、皇族末流の源平二氏を軸に権力に密着した「武士団」が成長していく中で、武士になり損ねた暴れ者たちは「鬼」と言われ「賊」として退治された。その中でしぶとく生き残ったものは「悪党」と呼ばれ、戦国時代まで頑張れば「野武士」という地位が得られた。運にも依るが、仕える主人によつては武士にもなれた。浮浪少年・日吉丸を見つけた出した蜂須賀小六の子孫は四国阿波の大名となり、明治維新で「侯爵」を与えられている。

## 文化街道

白井啓治

ことは座の発信拠点をギター文化館にしたことで、今年は頻繁にギター文化館に出かけている。石岡市医師会病院の脇を抜け坂道を登っていくと、一見北海道の富良野にでも来たかと思つてしまふような風景が目に見え込んでくる。早朝の朝靄のはけぬ時刻に通ると、本当にここは石岡かと疑つてしまふほど美しい風景である。

富良野と見間違ふような丘の風景の中をギター文化館に向つて少し進むと「富良野」という美味しいパスタを食べさせてくれる店がある。女優の小林さんとその店で良く昼食をとる。駐車場に車を入れ、外に出ると看板犬のウツチャンが店の中から大声で歓迎の声をくれる。

「来たよ」と声をかけ中に入ると足下を狂つたように駆け巡り抱っこをせがむ。膝に抱っこしてあげると帰るまでそこに静かにいてくれる。

私はどうやら人より動物に好かれるらしい。私の膝は猫の耳ちゃんの臭いが染み付いているのであるがウツチャンは全く気にする様子も無い。私の瘦せた膝より、ふっくら(?)暖かい小林さんの膝の上のほうがいいよ、と言つてお目玉を貰ってしまった。

北海道の富良野を思わせる丘の上から豊後荘病院に抜けるこの街道を、風景のそのままに新しい文化街道にでもなつてくれるとふるさとの愉快になるだろうなと思つている。

半ば絶筆宣言をして石岡にやつてきた乞食坊主なので、自分では何も出来ないが、この街道に稽古場が持てたら楽しいだろうなと叶いそうも無い夢を見ている。

稽古場の一角に十名も座れば一杯になるスタンドカウンターを設け、昼と夜の食事時だけカレーショップなどを開いてみるのも悪くはない。しかし、現実にそんな稽古場を持ったら、料理好きのわたしは、演劇を放り投げてカレー作り心血を注ぐことになり、小林さんから冗談ではない大目玉を貰うことになるだろう。

喜良寿里、柴間をぬけるこの街道は確りとしたコンセプトを持って、将来を見据えた夢を描くには絶好の地であろうと思つ。ギター文化館を中核に、いろいろな文化表現の場としての街道になる大きな可能性があるだろう。

三年間、石岡中町商店街の一角でふるさとル

ネサンスの手伝いをしてきたが、残念ながらあの通りは今のままでは歴史文化の街道にはならない。思考が余りにも閉塞しており、創造を生み出す力を失っている。

随分昔のことになるが、川越市の町興しに関する記録映画を撮ったことがある。当初の川越は映像に映す限り今の中町商店街に変わりあるものではなかった。閉塞感の漂う町であった。

若者が何かを始めようとしても潰されるのは石岡と同じであった。町興しを考える人たちの大方が呼び屋の発想しか持たないのも石岡と同じであった。いわゆる負の連鎖する町であった。

進化には突然変異が必要となる。しかし、突然変異が進化に認められるようになるためには、突然変異自体に強さが必要であるし、突然変異を進化の兆しと受け入れる環境も必要となる。突然変異は常に生じてはいるものであるが、大方の突然変異は単なる突然変異に終わって消滅してしまふ。

春に真壁のひな祭りを真似て、それなりの人の流れを作った。しかし、真似は単なる真似でしかない。ひな祭りをやったのだから端午の節句祭りをやるのかと思ったら、何も無かった。所詮は呼び屋の発想しかもてない負の連鎖である。

今、原稿を書く戸外から祭囃子の稽古が聞こえてきている。石岡といえは祭りでしょう、といわれる。果してそうか？

石岡の祭りも百年ほど前につくられたものである。高々百年では歴史の祭りとはいえない。

百年前、自慢のできるふるさとの祭りを作ろうと、呼び屋ではない発想の基に知恵を絞る、語呂合わせの関東三大祭りのコピーを作り、それにあわせて理屈も考えたのであろう。

それが呼び屋の発想で無かった証拠に石岡祭りは根付いていった。しかし、根付いた途端に進化が止まってしまった。今は、根付いた時の隆盛にただただしがみ付いているだけの祭りだといえる。

昨年、何年ぶりかで祭りの町に出てみた。露天商のテントだけのところや、テントも無い歯っ欠けの状態が随所に見られた。露天商にとっても魅力が薄らいできたのであろう。

高々百年ではあるが石岡の祭りを文化にと考えるのならば、そろそろ遅きの感はあるが変化し、進化させなければならぬだろう。不況で祭りの寄付が集まらなくなってきた、昔のようにやれなくなってきたという声も聞かれるが、そうではないだろう。

人ごみの嫌いな私ではあるが、今年も一度町に出てみようと思う。露天商の歯っ欠けが去年より増えているようであれば、今の祭りをやめる潮時であろうと思う。それは全国を渡り歩く露天商たちの確かな目が語っているのだから間違いないことであろう。

祭りを止めると主張しているわけではない。変わらなければ、進化しなければ文化の祭りとして残れないと指摘しているのである。次世代に対して夢としての物語を残せないのである。

昔は良かったという。しかし、それは良かった

たと思う時期にあなた自身が変化や進化を考えず、時の隆盛にぶら下がっていただけであったことを自覚してもらいたいと思う。

そうでない石岡に移り住んで暫くして聞かされた、歴史の町だとは言いが、歴史では飯が喰えんなどという馬鹿げた言葉を死ぬまで聞かされることになる。これでは叶わんと思うだけである。

半ば絶筆をした乞食坊主には何の力も無い。しかし、新しい文化街道のすることは夢にみたいと思っている。

女優の小林さんと立ち上げた劇団ことは座は、実質一年になる。一層のスケール感の増してきた小林さんの稽古を見ながら、この石岡に来て、彼女と出合ったことで創案した、手話を基軸とした朗読舞を、新しいふるさと文化として、業界にそれなりのポストにいる弟子や後輩達の残り少ない現役のうち認知させなければと思っている。そして、そのことに合わせ気に入っている風景のある街道を、新たなふるさと文化街道に夢見てもみませんかと思いたいと思っている。

旧石岡だ、旧八郷だとそんな線引きは入らない。勿論、小美玉市だ、かすみがうら市だ、行方市だという線引きも入らない。そんなことに張り合っていたらそれこそ「損な線引き」である。筑波山と霞ヶ浦を基点にこの常陸の国を眺めてみれば、大層な文化遺産の残る所である。

歴史や文化で十分すぎる飯が喰える。産業や歴史も文化である。飯を喰うことというのは文

化そのものであるにも拘らず、見渡すと美味いものがなく、歴史風土から生まれる産業を育てる創造も持とうとしない。

そんな風に目に映ってしまつる者に対してともしればよそ者という視線が向けられる。しかし、歴史というものを単位に求めると、千年が一位だという説がある。それから考えると石岡は僅か一単位の歴史でしかない。

一単位の歴史であつても、一単位の系図を持つて土地つ子と言えるものが何人いるのだからかと思つてしまつ。それよりも一日暮らせばふるさと「自覚し、明日の夢を紡ぐことが大切である。」

この常世の国の風景、伝説をモチーフにこは座の物語を書いているが、足下を見るほどに宝の埋まつていることに驚かされる。

やはりふるさとの将来を物語る文化街道を志向するのは必要なことであらうと思つ。

## 原稿募集してます

ふるさと風の会では、皆さんのご意見、文章を募集しております。400字詰め原稿用紙3枚程度にまとめ、事務局へご寄稿下さい。本会報にご紹介させていただきます。

ふるさと風の会編集事務局

## 風の寄稿

「歴史の里」は何処へ行つた 太田尚

かつて石岡市は「ようこそ歴史の里いしおか」という教育委員会の製作したパンフレットがあり、「歴史の里」をPRに努めていたのだが、最近はそのほとんど聞かれなくなったと感じるのは私一人であらうか。

平成五年、第三次石岡市総合計画では「自然と歴史・文化の共生」を掲げていたのだが、平成の大合併以後の新将来像は「風と時が輝く和のまち」という非常に抽象的な標語に変わっている。だが私の解釈ではこれこそ正に「歴史の里」に他ならないのだが・・・。

この「歴史の里」標榜のいきさつは、昭和五十八年、県の「教育行政の概況」に「歴史の里」の事業推進として

本県の特性を代表する文化財が多く所在する石岡市を「歴史の里」とし、史跡等の広域保存と環境整備を図るための助成を行い、文化財の一体的な保護・保存と普及活用の事業を進める。

とした県の方針があつた。

その後、役所期待の若手二人の課長が「あれは補助金行政ですから・・・」と発言されたのだが、たしかに、県の積極的な文化財行政としての補助金とそうではなく先ず補助金の枠があつて、何に当てようかと、その末に「歴史の里」

事業の推進では、ニュアンスの違いがあることを感じるのには彼らだけではない。

しかしながら、たとえそのようないきさつが存在していたとしても、「歴史の里」として県内で唯一選ばれた所が「石岡」であつたという点で、意味あることであることに違いはない。

この七月、県内では二七番目の国指定史跡として「水戸徳川家墓所」(常陸太田市)が指定されたが、その嚆矢は大正十年指定の石岡市の舟塚山古墳である。

石岡市の既存の国指定史跡は、東日本第二位の規模を誇る五世紀築造とされる前方後円墳の舟塚山古墳、そして国指定史跡の中でも一ランク上の特別史跡に指定されている国分寺・国分尼寺の二つの古代寺院跡があり、この三方所は旧石岡市の大字石岡に集中している。それと八郷地区には、国学普及に努めた幕末の志士佐久良東雄旧宅がある。石岡市はこの四ヶ所で、県内では水戸市の五カ所につぐ指定数である。

高レベルの史跡・遺跡が集中している大字石岡には、まだまだ国指定級の遺跡は数多くある。常陸国衙跡、鹿の子遺跡、茨城郡衙跡、茨城郡衙周辺寺院(郡寺・茨城廢寺・茨木寺跡、府中城跡、石岡城跡等)など。

平成十八年度までの六次に亘る調査で、石岡小学校敷地で検出された常陸国衙常陸国の役所跡の中核、一〇〇m四方の領域とされる国庁跡が確定され、今年三月になって国庁の西側の曹司と呼ばれる地域で、国司が政務を執つた国庁正殿の間口七軒に対して一一間と諸国国衙跡

の建造物として最大級の、平安京正殿に匹敵する規模の建物跡が確認された。建物の性格は不明だが大國とされる常陸国の国力を裏付けるものとされている。二年で調査を総括、報告書を作成して国指定史跡への申請を行なう予定と聞く。(「常陸の歴史」35号に、国庁確定までの報告文を掲載)

鹿の子遺跡、特に遺跡は、常磐自動車道建設時の路線上で発見され、質量ともに全国一の漆紙文書が出土している。この漆が付着した紙片は、いわゆる国庁から払い下げられた公文書で、その中の「人口集計文書」からは奈良時代末から平安時代初頃の常陸国の人口が約一九万人であったことが知られる。また、常陸の氏族名(関東では初出等の)等も判明し、その他貴重な遺構や遺物など多くの発見があり、「地下の正倉院」とまで形容された。しかし、この極めて貴重な「国衙工房」跡の文化遺産も保存運動もなく、遺跡の主要部分は破壊・埋滅の記録保存となってしまう。

他に勝れた歴史的文化的遺産のある「歴史の里」石岡の市民に文化財保全・活用の一貫した心があつたならば、せめてこの遺跡の全貌を概観できるような展示施設等の設置を要請出来たのではなかったかと悔やまれる。(参考文献「甦る鹿の子(遺跡)教育普及版・茨城県教育財団・一九八四年)

茨城郡衙・郡衙周辺寺院郡寺、茨城廃寺茨木寺は、常陸国の一一の郡の一つ茨城郡の役所と寺院である。役所跡は今の外城の地と推定され

ているが、調査の手は付けられていない。茨城廃寺Ⅱ茨木寺跡は昭和五十四(五十六)年、発掘調査が行なわれて金堂・塔・講堂跡等が検出され、法隆寺式の伽藍配置であることが確認されている。また、寺域北限の溝からは「茨木寺」の墨書土器が発見されている。北限の溝と建物との距離から寺の領域は約一六〇m四方と想定されている。しかし、二六年経た現在、未だ何の文化財指定もされていない。鹿末な扱いをうけている。ちなみに、この様な郡レベルの遺跡は、県内では新治郡、筑波郡、河内郡、鹿島郡、那賀郡、そして下総国の結城郡が調査されて全て国指定史跡となっている。

残念ながら、歴史の里石岡市の文化財行政の現実である。(参考文献「石岡市の遺跡」石岡市教育委員会、平成七年)

石岡城跡については、外城の地等と伝えられてきたが、県立歴史館研究員の櫻井 明氏は、「地名からみた『石岡城』の位置について」と題して論考を発表(「常陸の歴史」創刊号一九八七年)、「貝地と小目代」の間に「岩(石)城内(いわきじ)」「(中略)『石城前』という地名もあり、『岩城内』こそがまさに文字通り『石岡城』の位置と考える」とされている。

この伝承地名「岩城内」は恋瀬川低地に舌状に突き出ている台地端の外城の咽もとに位置している。石岡城の領域は外城に広がっていたとしても不思議ではない。

平成十七年、茨城大学の高橋 修教授が指導されている中世史研究室のメンバーによる調査

が行なわれ、小佐野浅子氏によってまとめられた「石岡城(外城)の成立とその軍事的位置」(「常陸の歴史」35号所載)によれば、これまで考えられていた建保二(一二二四)年、十三世紀の築城は、櫻井 明氏も否定されているように根拠薄弱で、一般的に「土塁や堀をもつ居館が東国において成立するのは十四、十六世紀の間である」とする研究成果に照らして十四世紀以降であるとされ、しかも「府中城・石岡城の両城は二城一体の城塞として機能していたと考えられる」とされて、先ず石岡城、そして後に府中城を築城して移ったとの従来説も否定されている。

また、暦応二(一二三九)年の「高師冬奉書」から、石岡城が単に大掾氏の拠点としてのみ認識されていたのではなく、北朝方の軍事拠点の一つとして把握されていたことがわかる」とされた。ちなみに、県内の南朝方とされる小田城・関城・大宝城跡は国指定史跡に指定されている。

ところで、今、恋瀬川の架かる駒潜り・田島・中津川を通る新道建設路線上で、高レベルの可能性のある遺跡が検出されている。

一つは、新道が高浜街道と交差するあたりの大規模な溝である。

\* (五条検出された中で)巾4mほどの大規模な溝が一条確認されている。重要遺跡の可能性も考えられるのでより詳細な試掘調査を要する。(「埋蔵文化財調査報告書」茨城

県文化課、平成十二年)

\* 前回の試掘調査で確認された巾約4mの溝の延長については、明確にはとらえられなかった。(「埋蔵文化財調査報告書」茨城県文化課 平成十三年一月)

\* (平成十二年十二月)再調査の結果、溝が途中で立ち切れてしまい、出土遺物も縄文土器片のみであったので重要遺跡とは(県では)認められないと言つものでした。(「石岡市長公印回答文 第6号」、平成十九年五月)

\* この溝は、試掘調査の結果から現段階では記録保存が適当と考えておりますが、最終的には発掘調査の結果に基づき遺跡の取り扱いを判断することになります。(「茨城県教育庁文化課長公印回答文 文第609号」、平成十九年七月)

次に、田島遺跡の第三次調査(南光院地区)で幅約一四mの堀跡とされる遺跡が検出された。

\* (南光院地区遺跡の)北西部から堀跡が確認されました。南光院が建立される以前は城として機能していたとも考えられます。(現地説明会資料「田島遺跡」県教育財団、平成十九年三月)

\* 中世以降の城に付随する一般的な遺構であることから記録保存が適当と判断しております。(「茨城県教育庁文化課長公印回答文 文第609号」、平成十九年七月)

この二つの検出遺跡についての回答文は、石岡市長・茨城県知事宛の指定書式に従つた「調査続行・遺跡の保全」の提言文に対するもので

ある。

右引用文(二文字)の茨城県文化課の文言は、そのもとは発掘を担当した県のプロ集団の教育財団のものであるが、どうであろうか平成十二年試掘当時と現在平成十九年の回答文言の著しい違い、行政的に捻じ曲げられたものとの解釈を禁じえない。そしてこの大規模な溝について市民には一切公表されていない。ちなみに、「調査報告書」は県の情報開示の手続きを踏んで入手したものである。

堀については、この冒頭に記した「歴史の里」選定のいきさつからしても、「城に付随する一般的な遺構」を理由として記録保存、つまり破壊・埋滅との判断では受け入れることは出来ない。県の方針に整合性がない。

元来、溝や堀は遺跡本体から離れた外周辺にあるのであつて、溝・堀の一部、それも新道路線上の限られた部分の調査で検出されたものであるから、その部分の調査だけでは遺跡本体の性格を明らかにするのは難しい、不可能に近いだろう。当然、溝・堀が途中で断ち切れたり、出土遺物がゼロということもあり得るのであつて、調査を続行して溝・堀の広がりを確認して、遺跡本体の場所を探るといふ方法も考えられる。調査の続行はただでは出来ないから軽々には論じられないが、新道建設にあつて「歴史の里」の埋蔵文化財を正視せず、ハナから記録保存との方針には承服できない。

検出遺跡で重要なものは、その一つには溝・堀の規模の問題がある。平成十二年、県の「試掘

報告書」でも、検出された五条の溝の内、「巾4mほどの大規模」な一条に注目している。

ちなみに、石小敷地で検出された常陸国衙城北辺の溝は巾三丁四m、国指定史跡・台渡里廃寺の伽藍地画溝で巾三丁四m、茨城廃寺寺域北限の溝幅一・八mと報告されている。また、国指定史跡真壁城の外周堀及び府中城北辺の濠幅ともに一〇m強と報告されている。

この様に、新道路線上で検出された溝・堀は、規模の上ではこれらの国指定史跡等と同等のものなのである。

そしてこの溝・堀について、石岡市文化財保護審議会に諮問せず、委員に通報すらされていない。「歴史の里」の文化財保護審議会が機能していないとはいつたかどうか。この様に見て来ると県や石岡市の「歴史の里」の文化財に対して、どこか素直ではなく、正視されていない。正常な考古学者や学芸員ならば、決して言わない書かないようなことを恥じることなく課長・市長公印文書として堂々の回答文になっている。これには理由があるのである。それは石岡市域で着工された道路建設が大前提となっているからである。

新石岡市では、八郷町との合併にともない新市建設計画」が策定され、原案に対し県との協議によつたといふ文言等の修正が行なわれたが、次の二点に注目したい。

原案

1 地域高規格道路である国道6号線バイパス

2 東国最大級である舟塚山古墳  
修正

1・・・国道6号千代田石岡バイパス  
2 県内最大級である舟塚山古墳  
実は

1・・・百里飛行場連絡道路(連結道)  
2 東国(東日本)最大級である舟塚山古墳  
又は、県内最大である舟塚山古墳

一見何でもないような修正にみえる。しかし、その根底にはとんでもない事実が隠されている。平成十年六月十六日、地域高規格道路(一般)計画路線に追加指定され、平成十年十二月十八日、地域高規格道路の路線指定に伴う整備区間(一般)として指定を受けたのは、起点・千代田町、終点・石岡市の六キロの百里飛行場連絡道路なのである。(知事宛の国からの公文書)

また、一般市民も見られる資料に茨城県議会の広報誌がありご覧になった方も居られるでしょう。路線図が描かれていて、百里飛行場連絡道路と添書されている。「県議会だより」一五六・一五九号)

そして、平成九年二月に国から認可された、いわゆる六号バイパスは石岡市以北の計画が全く示されていない、幻の道路だ。「県議会だより」の二つの路線図を見ても一五九号の路線図はいかにも不自然に見える。計画の初期では一五六号の如くではあったのであろうが、おそらく予算や早期開通の方針により、一五九号の路線図の如く既存の国・県道を一部利用する複雑な路線に変えられたのではないだろうか。ならば、

国道三五五号の利用を延長して、国道六号の交差点までとすれば新たな道路は開削・造成の必要はなくなり、高レベル或いはその可能性のある史跡・遺跡とその景観を分断・破壊することもなくなる。とかく、六号バイパスに予算が付けられる見通しは限りなく暗いように思われる。石岡市が喧伝する渋滞解消は、バイパスと連結道路では有無の違ひとなる。国の公文書と県議会の百里飛行場連絡道路にたいして県文化課と石岡市の六号バイパスとするのは通用しない。

また、茨城県最初の国指定史跡・舟塚山古墳の存在価値を行政的に捻じ曲げて評価を低くして「東国」を「県内」と改悪したのである。これすべて、道路建設事業最優先の結果なるものとの解釈を禁じえないのである。それにしても、この新国道の本質を示す国の公文書を知らずに(五月の時点で文化課担当官が認めておられる)、六号バイパスを公言し結果的に県議会の見解も無視している県の中核セクションである文化課は、かつて選定した「歴史の里」の事情・状況に全く配慮されず、路線上の検出遺跡を記録保存としていることは遺憾極まりないことである。

これは本来、「歴史の里」の役所に申し入れてもらいたいのであるが・・・、石岡市民が嚴重に抗議しなければならぬ。

石岡市民の皆さんにこれまでの事情をご報告して市民の誇りえる財産であり、万民共有の石岡のかけがいのない文化財の保全と活用に思いを致していただけることを願って摺筆いたします。

す。

平成十九(二〇〇七)年八月

**ギター文化館発「常世の国の恋物語百」特別公演**  
**小林幸枝が情熱のフラメンコの風に乗って、石岡府**  
**中城鈴姫伝説をギター文化館庭で、月下のもとに朗**  
**読舞！**

**ギター演奏協力：ギター文化館**  
**= 9月29日(土曜日)ギター文化館 =**  
**(午後6時半開場 7時開演)**  
(入場料：前売券2500円 当日券3000円)  
ギター文化館&ことば座事務局にて発売

編集事務局

〒315 0001

石岡市石岡13979 2

0299 24 2063

(白井啓治方)